

立正大学の大学「昇格」の実態に関する一考察

—大学昇格以前と以後の 教育方針・教育内容を中心として—

雨宮 和輝

はじめに

本論文は1918年に制定された大学令により大学「昇格」した私立高等教育機関（以下私学と示す）の中から、仏教系私学の立正大学に着目し、立正大学の大学昇格以前と以後の教育方針及び学部・学科組織の実態に着目し、最終的に立正大学がどのような大学を目指して設立されたのかを究明することを目的とする。

筆者はこれまで全体的な研究として、私学が社会に貢献する人材養成のための教育機関としての専門学校から、教育・研究機関である大学に昇格する過程で、教育方針及び学部・学科組織をどのように変化させたのかに着目し、どのような教育を実施する大学として設立しようとしたのかを究明することを目的としている。さらに、専門学校から大学へ昇格する過程で、各私学が自校をどのような教育・研究機関として性格付けようとしたのかを考察する。

以上のような全体構想のもとで、筆者は大学令下において大学昇格した私学の中でも、宗教団体を母体とする宗教系私学、特に仏教系私学とキリスト教系私学の大学昇格事例をこれまで考察してきた。大学令制定後、各私学は設備面、財政面における課題の解決に迫られた。各私学によって、大学昇格に際して解決すべき課題は異なっており、それら私学の中でも、従来、教義の教授を中心とした聖職者養成が教育の中心であった宗教系私学は、教育方針及び教育内容の面で大きな変化が求められた。特に、宗門内部の僧侶養成に特化した教育機関であった仏教系私学は、大学教育の中に各宗派の教義及び仏教教育をどのように位置付けるかが大きな課題となった。そこで、本論文では仏教系私学の中でも立正大学の大学昇格事例に着目し、教育方針・教育内容の変化の実態を分析する。

では、なぜ本論文では仏教系私学の大学昇格事例の一つとして立正大学を取り上げるのか。大学令制定以降、多くの仏教系私学が大学昇格を果たすが、それら仏教系私学の中でも最初に大学昇格

したのは京都市の大谷大学・龍谷大学であった。京都市の仏教系私学の大学昇格後、東京市の仏教系私学も大学昇格に向けて運動を開始し、東京市の仏教系私学の中では立正大学が最初に大学昇格を果たす。本論文では、立正大学の大学昇格に着目し、大学昇格に際して立正大学が他の仏教系私学からどのような影響を受けていたのか、また、立正大学の大学昇格が東京市の他の仏教系私学の大学昇格にとってどのような意義があったのかを究明する。

先行研究を見ると、立正大学の大学昇格事例の研究としては、安中尚史の研究が挙げられる¹。安中は日蓮宗大学林から立正大学設立までの期間に渡って分析しているが、立正大学内部の具体的な議論に関しては言及していない。また、立正大学沿革史としては『立正大学発祥四百年史』²及び『立正大学の百四十年』³が挙げられる。しかし、これらの沿革史は、立正大学の歴史に関する概略的な記述が多く、大学昇格に関する部分は、時系列順に出来事を記述するに留まっており、詳細な議論などに関しては言及していない。

以上の研究状況を踏まえ、本研究では以下の課題を設定し、立正大学の大学昇格以前と以後における実態を考察する。第一に、立正大学は大正期の東京市の他の仏教系私学と比較するとどのような仏教系私学として位置付けられるのか、また、どのような議論の末に大学昇格を選択したのかを明確にする。第二に、大学昇格以前と以後において、どのような教育方針のもとに、いかなる大学を理想として運営していこうとしたのかを明らかにする。第三に、大学昇格を経て、立正大学の学部・学科組織、そして、教育内容はどのように変化したのか、また、その変化の背景にはどのような議論が存在していたのかを明確にする。

なお、研究対象時期としては、立正大学内部で火災が発生し、校舎再建に向けた運動に伴って大学昇格運動が開始される1916年から、大学として認可される1924年頃までとする。

第一節 立正大学の大学昇格に至るまでの経緯

(1) 大正期東京市の仏教系私学の状況

では、立正大学は東京市の仏教系私学においてどのような位置付けであったのか、また、どのようにして東京市の仏教系私学の中で最も早く大学昇格を遂げたのかに関して確認しておきたい。

1922年には、京都市の龍谷大学、大谷大学が仏教系私学の中では最も早期に大学昇格する。1922年時点では、東京市には5つの仏教系私学が位置していた。以下の表1には東京市における専門学校令下と大学令下の各仏教系私学を表記した。

表1のように東京市に位置していた仏教系私学は、大正期において全て大学昇格したことがわかる。では、これら仏教系私学の中で日蓮宗大学の規模はどの程度のものだったのだろうか。表2に東京市の各仏教系私学の学生数を明記した。表2を見ると、東京市の仏教系私学の中で最も学生数が多かったのは、駒澤大学の前身である曹洞宗大学であり、日蓮宗大学の学生数は、豊山大学や天台宗大学のように100人以下の小規模私学と呼べる状況であった。そして、豊山大学や天台宗大学は、当時東京市の仏教系私学の間に存在していた複数の宗派が連合して大学を設立しようとする連

表1 専門学校令下及び大学令下の東京市に存在した仏教系私学の名称

専門学校令下	大学令下	設立主体宗派
日蓮宗大学	立正大学	日蓮宗
曹洞宗大学	駒澤大学	曹洞宗
豊山大学	大正大学	真言宗（豊山派） 天台宗 浄土宗 （設立後は三宗派合同）
天台宗大学		
宗教大学		

※東京府『大正十一年 東京府統計書』（1925年）より作成⁴

表2 東京市の各仏教系私学の学生数

学校名	学生数（本科・別科・研究科含む）
日蓮宗大学	95人
曹洞宗大学	246人
豊山大学	88人
天台宗大学	67人
宗教大学	225人

※東京府『大正十一年 東京府統計書』（1925年）より作成⁵

合大学設立構想に参加し、結果として、豊山大学、天台宗大学、宗教大学の3つの私学が合同して大正大学を設立する⁶。ただ、連合大学設立構想は元々3宗派以上の多くの宗派が連合大学設立に参加する計画として構想されており、その中には日蓮宗も含まれていた⁷。では、同規模の豊山大学、天台宗大学が連合大学設立への参加を選択したのに対し、なぜ立正大学は単独宗派での大学昇格を選択したのだろうか。以下、立正大学の大学昇格に向けた議論の実態を明確にする。

(2) 単独宗派での大学昇格を選択するまで経緯

まず、日蓮宗大学が単独宗派で大学昇格を選択した経緯を、宗会の議論を分析することで明確にしていきたい。

日蓮宗大学では、1916年3月に大学内部で火災が発生し、校舎が焼失した。校舎を再建するに際して、大学部を従来の大崎とは別置するという案が宗会で議論され、1917年2月の第十定期宗会では「日蓮宗大学再築敷地案」として「日蓮宗大学ハ大学科ヲ東京市承教寺境内ニ移転シ中学校ヲ現大崎大学所在地ニ別置ス⁸」といった案が提出されている。そして、1918年4月に行われた第十一定期宗会では大学移転における追加予算に関して議論され、移転案は承認されている。しかし、1918年に大学令が制定されたことにより、日蓮宗大学は校舎の再建と共に、大学昇格の問題にも取り組むことになっていく。

当時、東京市の仏教系私学では、前述したように連合大学設立案が最も現実的な大学設立案として考えられていたが、日蓮宗大学内部では単独宗派による大学昇格を行うべきとする方針が存在していた。第八代、第十一代学長を務める清水龍山は仏教界の動向を示した雑誌である『中外日報』において「若夫れ各宗連合の如きは可言而実不可行、何となれば宗門教育は即ち信念教育なり、各信仰を異にするもの々連合は終に苟合のみ苟合は即破綻なり」⁹と述べており、教義の異なる各宗派が連合大学を設立するのは困難であるとの見解を示していることがわかる。また、日蓮宗大学の学監望月日謙は第十二定期宗会において仏教連合大学設立に関して「各宗協同ノ大学ニ就テモ研究ヲナセシガ第一経済上各宗均等ト云ハ不可能ナリ又之ニ入学シ得ザルモノニ対シテ特殊ノ施設ヲ要スル場合ハ実ニ煩重ナリ次ニ教育統一上弊害及ビ信念教育上ノ不利等ヨリシテ実行難ト云フニ帰着ス」¹⁰として、連合大学設立が困難であると述べている。さらに「本宗トシテハ獨力教科大学ヲ設立スルノ理想ノ下ニ」¹¹として単独宗派での大学昇格を理想とすることが述べられている。このような意見を背景として、立正大学は単独宗派での大学昇格を選択したと考えることができる。

しかし、その一方で単独宗派の大学昇格が難しいとする考え方も大学内には存在していた。第十二定期宗会において、議員の一人は「各宗ノ多クガ独立ニテ単科大学ヲ経営スル能ハサル上ハ之モ一種ノ方法ナルベシ、大崎大学ニ就テ云ヘバ今直チニ新大学令ニ準拠センコト容易ニ非ズ大學ナル名稱モ或ハ撤回餘義ナキニ至ルカト思ル、」¹²として、現在の日蓮宗大学では単科大学を目指す大学昇格は困難ではないかと意見を述べている。また、東京の承教寺に移転する計画に関しても「仮ソメニモ大学ト称スル地所トシテハ狭少ニ過ギズヤ規模雄大ニ内容充実シテコソ大学ノ名実ハ具備スルナレ新大学令ニ拠ランコトハ将来待ツトシテモ少クモ其希望ニ居リ理想」¹³であると述べ、移転先の土地が大学の敷地としては狭く、規模的にも内容的にも、十分準備ができた段階で大学昇格すべきであるとする意見も存在していた。さらに、教学部長の佐野貫考は「新大学令ハ現在ノ教団トシテハ直ニ希望スル能ハズ、現行ノ處ハ自ラ異レバ直ニ大学令ニハ融レザル考ヘナリ、内容ノ充実ニ就テハ能フ限り努力スルモ要スルニ教職員ノ能力ナリ」¹⁴として、現状の日蓮宗大学は大学令に適合しないものであり、むしろ大学に相応しい教員養成の努力をすべきと述べている。

このように大学昇格に対して日蓮宗大学では単独宗派での大学昇格を目指す方針であったが、解決すべき課題も抱えていたことがわかる。ただ、日蓮宗大学においては、他の私学にとって大学令における大きな課題であった財政問題において、大学設立基金を募集する一百萬人会を設立したことで、財政問題を迅速に解決することができた¹⁵。財政問題を早急に解決できたことにより、日蓮宗大学は単独宗派での大学昇格を選択し、且つ、東京市の仏教系私学の中で最も早く大学昇格を遂げることができたのだと考えられる。

第二節 立正大学の大学昇格前後における教育方針

(1) 大学昇格以前における教育方針の形成

では、日蓮宗大学では大学昇格に際して、どのような教育方針が形成されたのだろうか。以下、

宗会における大学昇格に際しての教育方針に関する議論を分析し、大学昇格以前と以後における立正大学の教育方針の実態を明確にする。

まず、1920年の第十三定期宗会の議論を見ると、教学部長の神代知明は「本宗大學モ亦内容ニ於テ未ダ完備ト云フモ得ズ先キニ文部大臣ハ大學教育ニハ財産ト実力トヲ要スルコトヲ發布セラル而シテ大学令ニ依ラズンバ大學ノ發展ハ期シ難シ」¹⁶と述べている。その上で「宗教大学ノ昇格ニ就テ真宗浄土宗ハ既ニ決セリ本宗独り彼等ニ遅クル、ヲ恥ズ」¹⁷として、浄土真宗の大谷大学、龍谷大学が既に大学昇格に向けて動き出していることが取り上げられている。つまり、立正大学が大学昇格に向けて動き出した理由の一つに、他の仏教系私学が大学昇格している状況下で、大学昇格を成功させる必要があるという義務感があったと見ることができる。

しかし、日蓮宗大学では実際に大学昇格することが可能なのかが大きな焦点となった。ある議員は第十三定期宗会において日蓮宗大学が大学昇格で求められる教育機関としての程度に関して「大崎大学（＝日蓮宗大学）ハ新大学令ニ依ル望ミナレド本員ノ考ヘニテハ大崎大学ノ宗学程度ニ就テ未ダ十分ナリト信セラレズ」¹⁸という意見を述べている。この意見に対して、日蓮宗大学教授の馬田行啓は「宗乗ノ研究ハ不備ナレド宗乗ノ研究ハ如何ニ完全ニスルモ不備ナリ大学令ニ依ラバ従来ノ型ニ嵌マレル講義ヨリモ新研究法ニ依リテ効果大ナリト信ズ」¹⁹として、仏教に関する研究に不備があるものの、大学昇格によって新たな研究方法を得ることができると主張している。このような馬田の発言からは、日蓮宗大学においては、教育内容・施設ともに不十分ではあったが、大学令によって大学昇格すると共に、教育内容を充実させようとする教育方針があったことがわかる。

また、第十三定期宗会では、日蓮宗大学の入学者に関する議論も行われている。議員の一人は「従来俗人スラ日蓮宗僧侶ノ弟子分ナドノ名義ニテ入学ヲ許セシニ各派ノ僧侶ガ公然許サレザルハ不条理ナリ依テ大学全部ヲ開放シテ各教団ノ徒弟ヲ入レントスル希望ナリ」²⁰という意見を述べている。実際、1920年の日蓮宗大学の学則第十一条を見ると「本大学ニ入学スルコトヲ得ル者ハ本宗僧侶ニ限ル」²¹と書かれている。つまり、上記の意見は、従来まで日蓮宗に限定されてきた大学入学の門を、他の宗派にも開こうとするものであった。実際、大学昇格後の立正大学の学則には、宗派を限定するような文言は見られなくなっている。

こうして大学昇格に向けて動き始めた日蓮宗大学は、大学昇格の方針を「布教伝導の予備知識に供え飽くまでも宗門大学としての特色を保有し且つ教授方法の上にも改善を施すべきを以て宗門教育としての精神を減却せざるのみならず寧ろ一層向上せしめ」²²として、大学昇格の方針を宗門大学としての意義を失わず、大学昇格することであると述べている。

このように第十三定期宗会においては日蓮宗大学の大学昇格に対して様々な議論が行われ、大きな変化が生じたことがわかった。1922年に行われた第十五定期宗会では、大学昇格案は全会一致で承認される²³。そして、日蓮宗大学は1924年5月17日に、文部省から大学昇格を認可された。

(2) 大学昇格後の立正大学の教育方針の形成

では、立正大学の大学昇格後の教育方針は、どのようなものとなったのだろうか。大学昇格後、1924年6月に、立正大学では、大学昇格の祝賀会において『希望と回顧』という冊子を配布している²⁴。『希望と回顧』には、それぞれ、大学昇格後において、立正大学がどのような教育方針を形成していくべきなのかを立正大学関係者が各自の言説を述べている。以下、『希望と回顧』を中心に、大学昇格後の立正大学における教育方針はどのようなものであったのかを明確にする。

まず、大学昇格後、予科部長となった馬田行啓は『希望と回顧』において、日蓮宗大学の教育目的に関して「大学の主眼は人格の陶冶にあるのであつて、学術の研究や教授も畢竟するところは人格を陶冶するための前提に過ぎないと言ふても妨げが無い」²⁵と述べており、大学の主眼は人格の陶冶にあると述べている。そして、人格陶冶がどのように行われるべきであるかに関しては「今我が立正大学は日蓮學を中心とする大学であるから、人格陶冶の基礎が是にあるのは明白であつて（中略＝筆者）即ち本大学から如何なる人物が涵養されるかは、主に懸つて日蓮學の上にあると言ふべきである」²⁶として、日蓮學を中心とした人格の陶冶が大学における最も重要な使命であると述べているのである。このように馬田は大学昇格に際して、人格陶冶が大学の使命として重要であると主張している。また、同大教授の寺澤智了も、人格教育が最重要であると述べた上で「況や宗教学校の教育では徹頭徹尾人格養成でなければならぬ。そして、大学は最も完全な高尚な人格の養成所でなければならぬ」²⁷として、人格教育の必要性を主張していることがわかる。さらに、同大教授の岡教達も「本学の特色は日蓮主義を中心とする仏教学を大に發揮する事」²⁸と述べている。つまり、立正大学は大学昇格後、日蓮學の教授、そして人格養成を教育の中心に位置付けようとしたことがわかる。

さらに、馬田は立正大学同窓会が出版した『大崎学報』で立正大学の精神に関して「立正安国」²⁹——これが本大学の精神である、魂である。本大学設立の意義はこゝにあり、本大学存在の絶対勝価値はこゝにある。本大学の理想や使命はこの「魂」に基づいて掲げられ、本大学の「教育方針」は之より演繹され、諸の分科や学科目の配当や他の設備等は凡て之から割出されねばならない。而して本大学の「特色」や「学風」は実に並びに描きだされねばならぬ³⁰と、立正大学における特色・学風も「立正安国」という精神をもとに形成されなければならないと主張している。大学昇格後においても日蓮宗の教義である「立正安国」を教育方針の中心として大学を運営していったことがわかる。つまり、大学昇格後、立正大学においては、従来までの教義を中心としながら、人格養成及び陶冶を行っていかうとする教育方針が形成されたことがわかる。

以上のことから、大学昇格後の立正大学では、日蓮學を中心とし、さらに人格の養成・陶冶を中心とすべきという教育方針が大学の中心になったと見ることができる。

第三節 立正大学の大学昇格以前と以後の学部及び学科構成・学科課程の変化

(1) 大学昇格以前の教育内容の変化の経緯

では、立正大学における教育内容は大学昇格以前と以後でどのように変化したのだろうか。以下、日蓮宗大学と立正大学の学部・学科構成及び学科課程をそれぞれ分析することで、大学昇格以前と以後における教育内容の変化を明らかにする。

まず、大学昇格前の日蓮宗大学がどのような学内組織であったのかを見ると、日蓮宗大学学則の第一条では「本大学ハ宗学及仏教学、哲学文学等ニ関スル諸学科ヲ教授シ并ニ其ノ蘊奥ヲ攻究シ、以テ人格ヲ陶冶シ、伝導ノ法器ヲ養成スルヲ目的トス」³¹となっている。「伝導ノ法器ヲ養成スル」といった部分からも僧侶養成の教育機関としての性格が強かったことがわかるが「哲学文学等ニ関スル諸学科」といった部分を見ると、大学昇格以前より、仏教以外の学問教授も行っていたことがわかる。そして、日蓮宗大学の学内組織は中学部・大学部・研究院となっていた。図1は日蓮宗大学の学校制度大系である。

では、各組織においてはどのような学問を教授していたのだろうか。日蓮宗大学学則第三条では「中学部ハ宗学及中学校令ニ依ル高等普通教育ヲ施シ、補習科ハ中学部所定ノ宗学其他ノ学科ヲ教授シ、予科ハ高等普通教育ヲ施スト同時ニ本科ニ入ルト必要ナル予備学科ヲ教授シ、本科ハ宗学及佛教學、哲学、文学等ニ関スル諸学科ノ理論及應用ヲ教授シ」³³となっている。また、日蓮宗大学本科の学科課程一覧を見ると、学科課程には共通必修科目と選択必修科目が存在し、共通必修科目には仏教関連の学科目以外に哲学史や社会学、英文学が設置されている。選択科目には日蓮宗以外の宗派の仏教学以外に、キリスト教といった学科目も設置されている。日蓮宗大学は僧侶養成に比重が置かれていたものの、非仏教的な学科目も教授されていたことがわかる。

では、大学昇格に際して日蓮宗大学では大学昇格後の教育内容・設置する学科はどのように想定されていたのだろうか。第十三定期宗会においては、教学部長の神代知明が「大學ハ哲、史、文ノ三課ニシテ其中新大学ハ史学ヲ除キ其代リニ佛学ヲ入ルベシ」³⁴と述べている。神代は史学の代わりに仏学を学科として設けることに関して、大学令では仏学は設置学科として認められていない

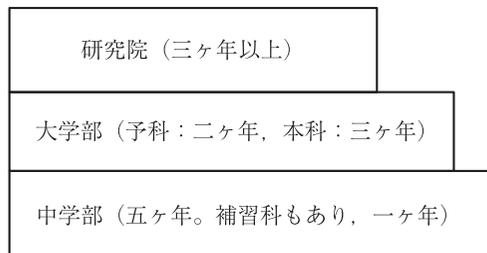


図1 1920年時点の日蓮宗大学の学校制度大系³²

[()内は修業年限]

が、予め文部省に了解を得れば問題ないと述べている。この意見に対して大学令において教授する教育内容に関しては宗会中に以下のような質問が出ている。

- (一) 哲史文中史学ヲ除キ仏学ニ變ジテ新大学令ニ依ルト云フ之レーノ條件トシテ聞ク可キカ
- (二) 文部省ニ出願シテ許サレヌ時ハ専門学校令ニ依ルカ
- (三) 現今ノ如キ社会問題ノ盛ナルトキニ必須科トスベキ社会問題研究科ヲ随意科トセルハ如何之レ将来ニアラズ現在ニ於テモ社会問題研究会ハアレド有志者ナク学校及ビ宗務当局ハ如何ニ考ヘラレル哉
- (四) 現今ノ如キ社会問題ノ盛ナルトキニ必須科トスベキ社会問題研究科ヲ随意科トセルハ如何³⁵

以上の質問に対しては、馬田がそれぞれ回答している。馬田は大学令の条件として仏学を教授する学科の設置が受け入れられるのか、また、もし仏学が設置学科として認められない際にはどうするのかという質問に対して既に大学昇格していた早稲田大学や慶應義塾の文科と同じような構成にする必要はなく「哲史文ノ三ハ動カシ難キ條件ト云フニ非ザル由ナリ故ニ史学ノ代リニ仏学ヲ入ル、ナリ」³⁶として、仏学を史学の代わりに学科として設置することは問題ないと述べている。

また、その上で仏学の設置が認められない場合には「哲学ノ内容ハ廣ク勿論宗乗余乗ヲ含マル」³⁷として、哲学の中に仏学を含めればよいといった旨の発言をしている。さらに馬田は「社会問題研究ハ必要ナリ大学ノ經濟許サバ一科ヲ設ケタシ而シ現在ニ於テハ之ヲ許サズ故ニ社会学ヲ学バシメ学理的ニ研究シ更ニ其餘力ヲ以テ實際問題ニ進マシメ必須科目トセザルハ学生ノ自由研究ヲ尊重ス」³⁸と述べている。第十三定期宗会では、大学昇格後に設置する学科は哲、文、そして、史学の代わりに仏学、また、社会問題を研究する学科の設置が構想されていたことがわかる。

ただ、大学昇格に際して、仏教以外の学科を設置することへの懸念も議論されていた。第十五定期宗会では議員からの「単科大学ノ内容ナリキ即チ哲、史、文ヲ主トセル大学トナラバ昇格シテ却テ宗門教学ノ衰退ヲ来ス憂アリ、依テ研究ノ餘地アリ」³⁹といった質問に対して、宗務総監を務めた武田宣明は「其点ニ就キテハ真宗、大谷等ノ各大学、及ビ文部当局ニ就テ研究調査セシ結果大学令ノ出テシ当時ヨリ見レバ大ニ其内容ニ変化ヲ来シ各宗教大学ハ其宗教ノ特徴ヲ学科ノ中心トシ哲史文ヲ併セヤツテ差支ナキコトヲ確カメタリ、依テ名ハ文科大学ナルモ其实ハ科大学テアル」⁴⁰と述べている。この言説からは、大谷、龍谷という、既に大学昇格を果たした京都の仏教系私学の教育内容が参考とされており、それらが既に仏教以外の学科目を設置して大学運営をしていたことから、宗門教学の衰退の心配はないと判断されていたことがわかる。

(2) 大学昇格後における立正大学の教育内容

では、大学昇格後には立正大学の学科目・学科課程はどのように変化したのだろうか。以下の図

2は立正大学が大学昇格した後の学校制度大系である。

立正大学は大学昇格後には研究科、学部、予科の3つの組織から構成されており、文学部一学部の単科大学となり、学科としては宗教科、哲学科、社会科、史学科、文学科が設置された⁴²。仏教科が宗教科という名称で設置され、史学科が設置されている点以外は、第十三定期宗会で議論された学科構想が反映されたことがわかる。また、1924年の学則を見ると、各学科の必修科目としては日蓮学と天台学が設置されており、宗教科は仏教及び宗教関連の学科目の比重が高いが、それ以外の学科に関しては非仏教系の学科目も数多く設置されている⁴³。では、立正大学における教育内容は、どのような方針のもと構成されたのだろうか。

大学昇格後の教育内容の構成に関しても、昇格祝賀の際に発行された『希望と回顧』において説明がされている。馬田行啓は立正大学での教授内容に関して「日蓮宗大学と立正大学との間に学科目其他の組織内容上に幾多の相違があるのは当然である。例せば従来は学科目の主位は宗学であつて、他の学科目は之に対して従属的關係に置かれたのであるが、今後は各学科目は其れぞれ同等の位置を占め同等の価値を有して、其間に少しも軽重主伴の差を認めないことになる」⁴⁴と述べており、大学昇格後は日蓮学とそれ以外の学科目に対して価値の差はないと述べている。さらに「本学としての学科目の中心は自ずから日蓮學にあることは今更事新しく論ずるまでもないことである。然しながら其れは只だ中心にあるといふだけであつて、これさへあれば他の学科目は何うでも好いといふやうな独占的位置を有するといふのではない。（中略＝筆者）立正大学はこの點を考慮して、従来一分科制であつたのを改めて、宗教、哲学、社会、史学、文学の五分科制とし、大学精神たる自由研究を重んずる」⁴⁵として、文学部の中に5つの分科を設置した理由を述べている。このように大学昇格後には日蓮学以外の非仏教の学問も日蓮学と同等の学問として教授されることになったのである。

しかし、大学昇格後、立正大学の新たな教育体制にも問題が発生した。1925年の第十九定期宗会では、議員側から「大学ガ昇格シテ宗教科、社会学科、文学科、哲学科等二分科サレタル結果文学科ノ志望多クシテ大学ノ中枢タル宗教科ヲ志望スル者ハ僅八九名ナリト聞ク」⁴⁶として、大学昇格後、宗教科を選択する学生が非常に少ないことを問題視する意見が出ている。大学昇格後、予科

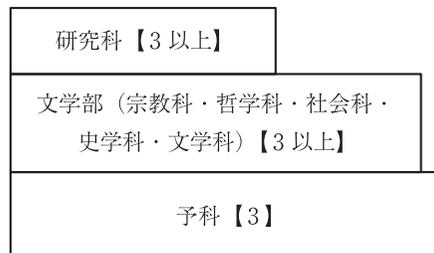


図2 1924年時の立正大学の学校制度大系
（【 】内は修業年限）⁴¹

部長となった馬田行啓はこの年度の入学者の割合に関して「学生四十名中ヨリ其志望科ヲ募リシ所宗教科ハ八名文学科ハ二三名に過ギズ社会学科ニ大部分ノ志望者アル」⁴⁷とした上で「大学昇格ノ精神ガ未ダ十分ニ徹底セザルヤヲ憂フ各学科ニ日蓮学及天台学等ノ佛教学ハ相当ノ時間ヲ儲ケテ必修科目トシテ課セリ宗学ノ専攻ハ出来ザルト云フ事ナシ」⁴⁸として、大学昇格の精神が浸透していないため宗学を中心とした学科課程へと変更する必要があると述べているのである。ただ、馬田は立正大学が設置すべき学科として「国家を安ずるには先づ「国家」其のもの々本質を究め其の軀相用を明らかにし、時代を洞察しなければならない。并に国家学政治学法学社会学等を包含する諸の学科目の理論的研究が必要である。本大学は啻に文学部の単科大学を以て満足すべきではなくて、是非共政治学部若くは法学部を設置しなければならない」⁴⁹と述べており、立正大学においては現在設置されている学部だけでなく、具体的には政治学部や法学部といった学部も設置されることが望ましいと述べていることがわかる。

以上のように、大学昇格に至るまでにおいても、多くの議論があった立正大学であるが、大学昇格後においては宗学を中心としながらも、大学として多様な学問を教授しようとしたことがわかる。

おわりに

以上、立正大学の大学昇格前後に関して、専門学校令下の日蓮宗大学が、大学令下で立正大学に大学昇格する過程における、教育方針・教育内容の変化の実態を分析してきた。以下、本論文での課題を確認する。

第一の課題は、大正期の東京市の仏教系私学の中で日蓮宗大学がどのような位置付けにあったのか、そして、どのような経緯で単独宗派での大学昇格を選択したのかを明らかにすることであった。日蓮宗大学は、他の仏教系私学と学生数を比較すると規模が大きい私学ではなく、むしろ、連合大学設立構想に参加した仏教系私学と同程度の学生数であった。しかし、日蓮宗大学内部では他の仏教系私学との連合により、宗教的教義の威信が低下する可能性があること、また、連合大学設立の実現性の低さが懸念され、単独宗派での大学昇格が選択された。また、一百萬人会という大学基金を募集する組織の貢献により、単独宗派でありながらも、東京市の仏教系私学の中で最も早く大学昇格することが明らかとなった。

第二の課題は、立正大学の大学昇格過程ではどのような教育方針が形成されたのかを明確にすることであった。立正大学の教育方針としては、大学昇格前より、大学に相応な高度な教育・研究が必要であるとの意見が存在し、大学昇格後には従来の教義である日蓮学を中心として、大学としての教育を発展させながらも、教育の中心として、人格陶冶、人格養成を重要視するという教育方針が形成されたことが明らかとなった。

第三の課題は、大学昇格前後においてはどのような教育内容が設定されたのかを明らかにすることであった。大学昇格に際しては、既に大学昇格を遂げていた京都市の大谷、龍谷大学を参考とし

て、仏教以外の学科目も教授することを設定した。ただ、立正大学の大学昇格に際しては、従来まで教育の中心であった宗教科が軽視されることが問題視されていた。ただ、結果として大学昇格後には日蓮学を中心としながらも、非仏教学科目も教授する教育内容の構成となったことが明確となった。

以上のように立正大学の大学昇格は、東京市の仏教系私学の中では最も早く、大学内部でも早期に大学昇格に関する議論が行われていたことがわかった。立正大学の大学昇格後には東京市でも駒澤大学、大正大学が大学昇格を遂げている。そこで、東京市の他の仏教系私学との比較を通して、東京市における立正大学の大学昇格の意義とはどのようなものであったのか、また、立正大学は大学昇格後、自校をどのような教育機関として性格付け、いかなる大学を運営していくことを理想としていたのかを明確にしたい。

東京市の仏教系私学として比較する対象としては、同じく単独宗派での大学昇格を遂げた駒澤大学が適当であると考えられる。駒澤大学の大学昇格では、僧侶以外の人材養成、そして、宗門外への大学の開放という教育方針が中心となっており、実際の設置学科や教育内容に関しても、非仏教的学科目を取り入れるのが中心となっている。これに対して立正大学では、仏教以外の学科を設置してはいるが教育方針としては日蓮宗の教義である日蓮学を中心とした大学を設立し、教育内容に関しても学科目の間に優劣はないものの、日蓮学が教育の中心であることを明言している。これらのことから、同じ単独宗派での大学昇格においても、その教育方針に大きな違いが存在したことがわかる。また、立正大学の大学昇格が早期に成功した背景には、宗門や信徒の多額の基金によるところが大きい。よって、立正大学の大学昇格は、宗門や信徒の貢献に対して、大学側が宗門のための大学設立を行おうとして事例であり、大学設立後においても、宗門のための大学としての運営を行っていかうとしていた事例であったと見ることができる。

今後の研究では今回の立正大学の大学昇格事例を手がかりとして、東京、京都だけでなく、関東及び関西における各仏教系私学、もしくは、キリスト教系私学も含めて、各宗教系私学が大学昇格に際してどのような動向を見せたのか、また、大学昇格に際して他の宗教系私学の大学昇格事例を参考としたのかといった事実を分析し、各宗教系私学がどのような大学を目指そうとしたのかを究明することを試みたい。

【注】

- ①安中尚史「近代宗教教育に関する一考察——日蓮宗大学林建設について」『日蓮教学研究紀要』立正大学日蓮教学研究（1991年3月、第18号）17-28頁。②安中尚史「近代宗教教育に関する一考察（その二）—日蓮宗大学林から立正大学への昇格について—」『日蓮教学研究紀要』立正大学日蓮教学研究（1992年3月、第19号）51-61頁。
- 2 立正大学同窓会『立正大学発祥四百年史』（1980年）
- 3 立正大学史編纂委員会『立正大学の140年』（2012年）。
- 4 東京府『大正十一年 東京府統計書』（1925年）658頁。

- 5 東京府『大正十一年 東京府統計書』（1925年）658頁。
- 6 雨宮和輝「大学令下における仏教系私学の連合大学設立に関する考察 ―教育目的・学部組織の変化に着目して―」『早稲田教育評論』（第31巻第1号，2017年3月）85-100頁。同論文では、仏教連合大学として大正大学の設立の経緯を明確にしている。
- 7 各宗教育調査会『仏教各宗派連合大学設立私案』（1922年）の20頁を見ると「各宗派の負担額は何程か」といった項目がある。同項目では、各宗派連合大学設立に際して、各宗派がどの程度の金額を出すべきなのかという点に関して述べられており、そこでは既に大学昇格している東西両本願寺を除き、天台、真言、禪、浄土、日蓮宗にそれぞれ大学設立のための負担を検討していたことがわかる。
- 8 日宗新報社『日宗新報』（1917年2月26日発行，号外）3頁。
- 9 『中外日報』「新大学令に対し宗教教育機関を以下にすべき乎（其十）」1919年1月26日，第5833号。
- 10 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1919年4月10日，第29号）22頁。
- 11 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1919年4月10日，第29号）22頁。
- 12 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1919年4月10日，第29号）22頁。
- 13 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1919年4月10日，第29号）31頁。
- 14 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1919年4月10日，第29号）46頁。
- 15 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）9頁。日蓮宗大学では大学基金のために一百万人会を設立している。一百万人会は基金として100万円を集めることであり，設立の際には「宗門ノ百万人が浄財ヲ出シテ教学基金一百万円ヲ完成スルコト、ナル百萬ノ標準ヲ立テシ」として百万円を集めることを目的とされていた。そして、日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1922年4月11日，第65号）20頁を見ると，この時点で75万円が集まっている状態であった。以上のことから，一百万人会は大学設立に大きく貢献したと言える。
- 16 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）10頁。
- 17 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）11頁。
- 18 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）11頁。
- 19 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）11頁。
- 20 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）60頁。
- 21 『日蓮宗大学一覧 大正九年四月現在』（1920年10月25日）。
- 22 中外日報社「日蓮宗大学昇格案提出 一百万人会の計画」『中外日報』（1920年3月6日，6139号）3頁。
- 23 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1922年4月10日，第65号）7頁。
- 24 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1924年7月10日，第91号）37頁。
- 25 浅井要麟編『希望と回顧』（1924年6月15日，立正大学同窓会）6頁。
- 26 浅井要麟編『希望と回顧』（1924年6月15日，立正大学同窓会）7頁。
- 27 浅井要麟編『希望と回顧』（1924年6月15日，立正大学同窓会）49頁。
- 28 浅井要麟編『希望と回顧』（1924年6月15日，立正大学同窓会）64頁-65頁。
- 29 村上重良『日本宗教事典』（1978年，講談社）によれば「立正安国」とは「正法をたてることによって，国土の安穩がもたらされるという思想」と解説されている。
- 30 立正大学同窓会『大崎学報』（1925年3月10日，第66号）3頁。
- 31 『日蓮宗大学一覧 大正九年四月現在』（1920年10月25日）。
- 32 『日蓮宗大学一覧 大正九年四月現在』（1920年10月25日）。
- 33 『日蓮宗大学一覧 大正九年四月現在』（1920年10月25日）。
- 34 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）10頁。
- 35 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）11頁。
- 36 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）11頁。
- 37 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）11頁。
- 38 日蓮宗宗務院『月刊宗報 付録』（1920年4月10日，第41号）11頁。
- 39 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1922年4月10日，第65号）20頁。
- 40 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1922年4月10日，第65号）21頁。
- 41 国立公文書館所蔵『立正大学学部学則中変更認可』（請求番号・3A-009-02・00128100）。

-
- 42 国立公文書館所蔵『立正大学専門部日蓮宗大学ヲ立正大学専門部ト改称並ニ学則変更認可』（請求番号・3A-009-03・00169100）。立正大学では専門部は1925年に設立されているため、1924年時点の図2には示していない。専門部には宗教科、国語漢文科、歴史地理科が設置された。
 - 43 日蓮宗大学において日蓮宗学以外に天台宗学に比重が置かれているのは、日蓮宗の開祖である日蓮の弟子たちが、天台宗とのつながりを強めることで教派の拡大を図ったという歴史的経緯から、日蓮宗大学では天台宗学を重視したと見ることができる。
 - 44 浅井要麟編『希望と回顧』（1924年6月15日、立正大学同窓会）4頁。
 - 45 浅井要麟編『希望と回顧』（1924年6月15日、立正大学同窓会）5頁。
 - 46 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1925年4月10日、第100号）20頁。
 - 47 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1925年4月10日、第100号）18頁。
 - 48 日蓮宗宗務院『月刊宗報』（1925年4月10日、第100号）20頁。
 - 49 立正大学同窓会『大崎学報』（1925年3月10日、第66号）2頁。